

[巻頭言]

社会科学の学問的特性と社会的役割について

新潟医療福祉大学 副学長 丸田 秋男

社会科学の研究は、保健・医療・福祉・スポーツの各分野の研究者並びに専門職から成る本学会の発展に向けて欠くことのできないものであるが、その学問的特性と社会的役割は必ずしも十分に認識されていないのではないかと危惧している。

ここでは、文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会「人文学及び社会科学の振興について（報告）」（平成21年1月）の概要を紹介し、本学会における課題提起の一つとしたい。

○社会科学は、人間集団や社会の在り方を主な研究対象とする学問であり、社会を構成する人々や集団の意図や思想といった「価値」に関わる問題を取り扱うこととなるので、自然科学と比較して、より複雑な研究対象を取り扱っているといえることができる。

○社会科学は、自然科学のように「証拠」に基づき「事実」を明らかにするとともに、「論拠」を示すことにより「意味づけ」を行うことをも目指しているため、研究者の見解や価値判断を通じた「意味づけ」が不可欠である。つまり、人間の行動や社会現象などの外形的あるいは客観的な測定を行う研究方法と研究者の見識や価値判断を前提とした研究方法が併存することになる。

○社会科学は、研究対象である歴史事象や社会現象等の「説明」（分析による個別的で客観的な知識）と、その意味づけとしての「理解」（対話を通じた（認識）枠組み）という二つの側面を有する学問であるため、社会科学の成果は歴史や社会における実践性が重要な要素となり、「唯一の真理」を提示する自然科学とは異なるといえる。

○社会科学は、事実の発見や説明だけでなく、「理解」や「対話」という方法を通じて「（認識）枠組み」を構築する在り方をも含むこととなる。したがって、研究手続きの適切性や当該分野の過去の研究蓄積に対して新たに何かを付加することができたかという評価に止まらず、現実の社会や人々の生きた歴史の場における「意味」や「価値」のレベルでの評価が存在することになる。

○社会科学は、政治や経済に対する人々の見解の形成に一定の影響を与えるという実践的な帰結が伴う「実践」の学としての役割・機能、政策や社会における課題の解決などの社会的貢献の役割等をもつ。これは、自然科学においては学問内の論理から最先端の課題が設定されるのに対し、社会科学は社会の現実が「最先端」の課題になることを意味することとなる。

○社会科学の評価においては、その学問的特性から「歴史における評価」や「社会における評価」の意義が重要である。ある程度確立された評価システムと評価指標をもつ自然科学の評価方法が、社会科学にそのまま導入された場合には、社会科学の発展に問題が生じる可能性があるため、定性的な評価の重要性を確認するとともに、「書籍」という形での成果発信の方法を積極的に捉える必要がある。

以上が、委員会報告での主な指摘であるが、この指摘を会員の皆さんはどのように受け止めるのか。少なくとも、社会福祉研究の一隅に身を置くものとしては、社会科学の学問的特性と社会的役割を十分に自覚し、現地調査を中心とした研究やシミュレーション手法を用いた研究等による実証的研究に取り組み、その成果の発信に努めたいと考えている。

注)「対話」とは、他者との関係性の成立を指す。社会科学はその場としての「社会」を説明し、理解を共有する学問として捉えている。